



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

高橋, 秀典

CITATION:

高橋, 秀典. まえがき. 技術室報告 2016, 17

ISSUE DATE:

2016-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233531>

RIGHT:

まえがき

京都大学防災研究所技術室長 高橋 秀典

京都大学防災研究所技術室の2015年度の活動成果をまとめた技術室報告第17号が完成しました。この技術室報告を読んでいただくことによって、それぞれの技術職員の2015年度における技術支援実績や、それぞれが持つスキルなどの一端を、知っていただけると幸いです。

防災研技術室は、1996年5月に設置されたので、2015年度はちょうど設置20年目という節目でした。その節目の年を、室員17名体制で乗り切りました。技術室の歴史のなかで、最小の人員体制です。防災研技術室の人員が最大だったころにくらべて、2分の1という水準です。

このような少人数体制だったにもかかわらず、所内における技術支援の量は、ここ数年とほぼ同じ水準を維持することができました。これは、ひとえに技術室全員の努力の賜物であると自負しております。だれか一人だけでは担当し切れないような技術支援を、各人のスケジュール調整によって、複数の技術職員が適宜分担して対応することも多々ありました。こういった技術支援方式は、組織としての技術室がうまく機能している一例だと思います。ほかの部局の技術職員から、真似ができないと言われるほどのシステムです。

2016年4月には、おかげさまで3名の新人を迎えることができ、2016年度は20名体制でスタートを切ることができました。多少、人数が増えたとはいえ、今後も防災研における技術室に対するニーズを探り続け、限られたマンパワーを選択と集中により、有効に活用する必要があることは、技術室全員が肝に銘じているところです。

われわれ教室系技術職員は、2015年10月から始まった新たな人事評定期間から、新しい勤務評定基準を採用することになりました。従来に比べて、部局内で求められる役割を全うしているかどうかを重視されます。そういった意味からも、部局内でのそれぞれの技術職員の立ち位置を、各技術職員は改めて認識する必要があると考えています。

防災研技術室は、これからも教員の方々、事務部の方々に、ご理解と一層のご支援をいただけると期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

末筆になりましたが、技術室報告第17号の取りまとめに当たってご協力いただいた皆さんの労に深く感謝いたします。